

[翻 訳]

カナダ詩人訳詩集Ⅲ

エリザベス・ブルースター、
アン・ズミガルスキー、パトリック・レイン詩篇より

松 田 寿 一

収録詩

エリザベス・ブルースター

「零下30度」

「カナダ詩の未来」

「ロマンス」

「私の郷里」

「サスカトゥーンとエドモントンを
つなぐ道」

「こことそこに訪れる夏」

アン・ズミガルスキー

「イラクサ」

「ちょっとした手術」

「灰色の瞳のフランシス」

「天使たち」

「ある産婆の話 第1話」

「ある産婆の話 第2話」

「子守歌」

「ハリンカ」

パトリック・レイン

「象」

「野生馬たち」

「身をよじりながら横たわる女」

「サスカチュワン」

「マウンテン・オイスターズ

(雄羊の陰囊)」

「ボゴタの子どもたち」

「もしも」

「生きていただけ」

「晩餐」

「マカロニの歌」

エリザベス・ブルースター
(Elizabeth Brewster)

「零下30度」¹

私を知ったどの風よりも
プレーリーの風は冷たい音を立てて吹き渡る。
白くくもった窓の外
雪が通りに渦巻いている
国中に深く
降り積もる雪のこと、
凍りついた道に
動けずにいる車のことを私は思う。
男がひとり
毛織りの覆いで顔を伏せて歩いている、
身を切る風、
目を突く風を避けようとして
ときおり体の向きを変えながら。

不意に亡くなった父の姿が浮かび上がる
着古して くたびれかけた外套をまとい
帽子のつまみで両耳を覆いながら
ニューブランズウィックの雪降りすさぶ道を
頭を垂れて
家路に向かう父の姿が。

(1972年)

*ニューブランズウィック カナダ南東部の大西洋岸に面した州。エリザベス・ブルー
スターが生まれ育った州。

「カナダ詩の未来」²

私たちは近代的で機械化された国に住んでいるという人がいる、
とすれば大切なのはトロントやモントリオール、
それにヴァンクーヴァーくらいなものか。
でも私にはアルバータのグッドリッチの方がいい、
電気が通ったのは1953年で、
電話が繋がったのだから1963年の小さな町。

グッドリッチで
一番大きな行事と言えば
誰かの金婚式を祝うことぐらい。
ガーデニング愛好会、青年農業クラブ、
そして昔から町の信用組合があり、
お別れ会には必ず皆が集まってくる、
たとえ暴風雪が吹き荒れる日でも。

グッドリッチの最大の関心事、それはお天気のこと。
雪の中で脱穀したときのこと、
マイナス70度にまで下がった冬のことは忘れない。

ホワイト・ラット・スクールから来た先生の計らいで
車に8人の子どもたちが乗り込んで

はるばるエドモントンにまで
旅した日のことも覚えている。
ジューブリー音楽堂や
議事堂にうっとり見とれ、
カナダ鉄道の化粧室に立ち寄ったこと、
でも一番みんなが興奮したのは
エレベーターの上り下りにだったことを。

次の世代に一人は詩人が生まれてほしい
アルバータのグッドリッチから、
それが私の願いです。

(1972年)

*グッドリッチ (Goodridge) エドモントン市から北東に約120マイル。幹線道路から離れた小さな町。

「ロマンス」³

ロマンティックな魚だから
鮭はすてきだとメアリーは言う。
産卵のためだけの2千マイルもの長い旅、
愛と死の儀式の中で迎える死、
残した体は子孫が生きる糧のため。

でもそんなふうにか弱いのは
パシフィックサーモン
太平洋の鮭だと知って

私はほっとする。

アトランティックサーモン
大西洋の鮭は

何度もそうした旅を繰り返すから、
でもその旅ごとに新たな傷を
年輪のように
体に刻んではいくけれど。

(1972年)

「私の郷里」⁴

人は育った場所から出来ている。密林や山地の気配、
熱帯の優美さや海を見つめる涼しげな視線を携えて。でも都会の 대기、
そこからは何と違った雨粒が落ちてくることか、スモッグのにおい、
それとも春のチューリップのように何のにおいを放つこともなく、
自然は小さな区画に植え込まれ
中央にはきまって噴水がある。博物館のにおい、
美術品ですらガイドブックの中にこぢんまりと収めて。
職場のにおい、たぶんニカワ工場からなのか、
クロムメッキのオフィスやラッシュアワー時の
地下鉄の人混みのにおい。

でも私の郷里の人々は心に
森や松並みの拡がりを携える。
燃え尽きた藪の中にブルーベリーがのぞき、
朽ちて、ペンキのはげた木造の農家、
ニワトリたちが鳴きながら歩き回る裏庭、

傷んだ校舎の陰に揺れるスマレの花。そこは冬と春が
心を占める二つの季節、氷の季節とそれが割れてくる季節とが。

心の扉が押し開かれると、
雪原の凍てつく風が吹き寄せてはくるけれど。

(1977年)

「サスカトゥーンとエドモントンをつなぐ道」⁵

そう、そこには丘もあれば、
木だって生えている、
プレーリーには。道だって、まっすぐばかりとは限らない。
でもいつも故郷は晴れの日だと歌われる
あのカンザスの平原とは違う、
私が育ったところより
はるかに高く広い空の上では
雲が絶えず方向を変え
にわか雨が降るかと思えば
いつしか日差しが戻ってきたりもするのだから。

私はこの景色を呼び直してみたりもする
あの湖みたいなものは「沼地」
四角い農家の前に幾何学的に植えられたものは
「ポプラの風よけ」と呼んで。
でもすべてが
表わしきれないほどの大きさだけ。

小さな町がプレーリーのおきまりの風景で、
きまって揚穀倉庫や
玉葱型の教会が立ち
中華レストランがある。

でもキットコティやイニシュフリーの近くには
ケルトの風情が漂っている、
アイルランドを思わせる
湿った谷間に湛えられた湖水
新緑の草、
あの「九列の豆の畝」や
故郷に焦がれ ようやくそれを見出しかけた
ひとりの移住者のことが
心に浮かぶ。

ここが私の故郷かしら。
ここを離れて故郷と思える土地はあるかしら。

(1977年)

*いつも故郷は晴れの日だと歌う 原文では “It is not/ home on the range/ with
perpetually sunny skies” となっており、カンザス州歌 “Home on the Range” の
第1連 “Oh, give me a home, where the buffalo roam/ (中略) /And the skies are
not cloudy all day” を想起させる。

*キットコティ (Kitscoty) サスカトゥーンからエドモントンへ向かう16号沿いの
町。

*イニシュフリー (Innisfree) 同じくサスカトゥーンからエドモントンへ向かう16号
沿いの町で50マイルほどエドモントン寄り。近くに Birch Lake という湖がある。こ

の地名は「ああ、明日にでも行こう、あの島へ／そしてあそこに小屋を立てよう。／」
(加島祥造訳) と謳われたW.B.イェーツの詩「イニシュフリーの島」(The Isle of
Innisfree) で知られる(加島訳では「湖のなかの島」)。

*九列の豆の畝(the nine bean-rows) 上記のイェーツの詩の一節から。加島訳では
「壁は泥土、屋根は草葺きでいい／豆の畑は畝を九つ、蜂蜜用の巣はひとつ／その蜂た
ちの羽音のなかで独り暮そう」(下線筆者) となっている。

「こことそこに訪れる夏」⁶

今年の6月はめっぽう寒い。

大波のような緑の木々が雨と風に撓んでいる。

バルコニーに残された芝生用の椅子は

今にも吹き飛ばされそうなくらい。

だから本当に夏が訪れているような

そんなどこかへ焦がれてしまう、

熱波の中でぐったりと過ごす日々

湿った芝にしなだれるケシの花

柳は川面に

汗ばむ緑の髪を

なびかせる

荷車を

引いた男たちが

街角で

アイスクリームを売る通り、
ギターを
かき鳴らす人、
木戸銭を求めて
チョークで舗道に
絵を描く画家もいる

いつか
どこかで
濃密な花の香りが漂っていた夜のこと
コオロギのように鳴く
暑い虫たちの声
窓辺にまで蒸し上がる
湿った大地のにおいを思い出す。

そんな夏が今私に訪れている。
でもそれは この6月の
冷たい雨のにおい
濡れた通りを滑る車の
水しぶき
そして迫りくる夜の闇

再び私が還っていく
この国の6月から
ひととき思い描いてみただけのこと。

(1982年)

アン・ズミガルスキー
(Anne Szumigalski)

「イラクサ」⁷

私がいつか年老いたなら
靴の紐はほどけたままに
ひび割れた舗道をよろよろ歩いているだろう
その日が火曜日だということも
(それは私の入浴日なのだけれど)
すっかり忘れたおデブの老婆のように
ちょっときついにおいを放ちながら

長年の垢がしみてごわごわの服
年寄りだから汗のせいではないけれど　そしてぶつぶつ独り言
欠けたほうろうのマグカップ

私の一日分のミルクを
分け合いながら
11匹の猫たちが雑草の茂る裏庭で
遊んでいるだろう　シュルルー　シュルルーと
猫は家の周りを走りながら
夜にはそれぞれ体を丸め
窪み汚れた寝床や椅子
パンくずだらけのテーブルの上で
きっと眠っているだろう

ある日死んだ私を猫たちが見る
おやおや死んでいる 死んでるぞ
死臭の漂う
一束の遺品

手には
すりむけた魔法の杖
耳元には一匹のコオロギが坐っている
物語や予言のことは

そして暗黒の時間のことを私に語りかけながら

(1974年)

「ちょっとした手術」⁸

外科医のおかげで私たちは繋がった
あなたの左耳から
私の右耳に
長いワイヤーを通してくれて

麻酔から覚めると私たちはまず
頭の上げ下げの練習をし始めなくてはならなかった
あなたが頭を頷かせると
私も首をびよこんと傾ぐ
二人の頭はいつも一緒に動いていた

ワイヤーがぴんと張ると
何だか頭の中はもつれた感じ
緩すぎると
それはネックレスにからみついた

でも二人が
そうした動きに慣れたとき
散歩くらいは
できるようにはなってきた

私たちが今朝
ゆりの花に見とれていると
二人を結ぶワイヤーに鳥が列になって留まっていた

夜の帳が降りた今も
鳥たちはここにいる
9羽のスズメ　そして1羽のキングバードが

(1974年)

*キングバード (kingbird)　北アメリカに広く分布。日本ではタイランチョウ (tyrant flycatcher) と呼ばれるヒタキ類の総称。尾の先が白く、羽毛は灰黒色。つがいで巣やテリトリーを守る際の攻撃的な性質で知られる。

「灰色の瞳のフランス」⁹

こんな風にいつも聞かれる
「お子さまはいらっしゃる？」
「お母さまはお元気？」かと

つまり彼らが知りたいことは
夫がいるかということと
夜は一人で眠るのかということだ。

私の母と私
そして私の娘と
彼女の娘の四人で写真を
撮ってもらったことがある

私たち三人は写真の中で微笑んでいたけれど
その子は暗い片隅から
色あせた造花の
スマイルの束を握ったまま
気むずかしい顔で
見つめている

小柄な体のフランス
灰色の瞳のフランス
ときおりなだめにくいこともあるけれど
いつも優しいフランス

私はその写真を包んで
昔の恋人に送る
もう十年も便りのない
あの人に

でもそれは愛とは無関係
なだめにくい自分がそんな風にさせるだけ

(1980年)

「天使たち」¹⁰

彼らが木をねぐらにしていることに
気がついていた？
鳥とは違って
反対向きに翼をたたんではいるけれど

でも目が弱ってきている母親は
朝早くに起き出して野リンゴの木から
彼らを追い払おうとする
小さな切り込み溝のある樹皮の
立派なオリーブの木に
彼らのフンを落とされたくはなかったから

いつも戸口に箒を置いて
枝から彼らを追いたてる
優しい調子になりすぎぬよう

「さあ卵を産むのですよ」と訓告する

彼らを巣穴に向かわせようと
母が雌鳥の鳴き真似をしていると
天使たちは這い降りてくる
そしてぎこちなく湿った地面に飛び降りる

でも母は気づかない 母が怒り出さないうちに
天使たちはあの白い羽毛の下から
冷たいバラ色の手をあげて
うやうやしく頭を下げ
母とあたりの大気に祝福を与え
もやの中に還って行ってしまったことを

(1980年)

「ある産婆の話 第1話」¹¹

愛されたことのない
独り身の若い女が子どもを一人
カブ畑に
産み落とした
旅の途中の出来事で
まだ先があったために
死産のその子を
そこに埋め
葉っぱと土で盛り土をこしらえて

カブの形のその子の頭を
覆い隠した
それから何年も経たない頃に
戻った彼女が
驚喜したことに
7ヶ月の子を植え込んだ場所に
見事な大木が
そびえ立っていた

そしてその暗い枝の間には
数百羽の鳥がさんざめき
彼らの滋養のフンが
大地を白く覆っていた

(1980年)

「ある産婆の話 第2話」¹²

経産婦の妻が
(つまりこれが初めてではなかったわけで)
分娩のために体毛を剃り 掛け布で覆われて
担送車に横たわった
陣痛の間中
彼女は正確なリズムで息みを続け
こんなことは
たいしたことでは全然ないわと
つとめて冷静さをよそおった

彼女が仰天したのは
赤い獣の頭が顔を出したときのこと
ほどなく
一匹の狐がもがき出て
床の上に飛び降りたかと思うやいなや
看護婦の一人が
開けておいた
ドアを走り抜けて行ったのだ

狐は町へと逃げ出して
餌や寝床を探していると
ある戸口で彼に情けをかける
一人の女と出会う
女は昔の犬の餌皿から
毎日狐に食を施した
もちろん家には
一步も入れはしなかったけれど

その後狐を産んだ母親は何事もなく暮らしていたが
あるときバスで
隣り合わせた人が
こう言ったことがある 「あなたのことは知っているわよ
狐を産み落とした女性でしょ テレビで見たわ
でも恥ずかしがることはないわ
どのみち誰にも起こりうることだから」

(1980年)

「子守歌」¹³

女は男に1個のオレンジを差出している
それは彼女の手の中で冷たく重い

男はその女からの贈り物を怖れている
どんなものも受け取ることが怖れている
とりわけオレンジは。

なぜなら彼は知っているから、そこには
女の肝臓や心臓が、
両腿と垂れ下がる乳房が入っているのだと。
そして 夜泣きをし
鼻水を垂らした
子どもたちも潜んでいるのかもしれないから。

女は再びおむつを替えようと
子どもの方を見る
いつものように服を脱がせ
小川でその子の体を洗ってやる
水は流れ
その子の汚物を川へと運ぶ
川はそれを海へと運ぶ

男は一本の大枝に背をもたれ
木の股に坐っている
女のあとについて家に入るのが
怖いのだ

やがて夜が訪れる 女はランプの灯をともし
男は女の影が窓をよぎるのを見る
笑いながら子どもを寝かしつける女の声が男の耳に聞こえてくる

(1983年)

「ハリンカ」¹⁴

死産の子はね、その子の枕元に
鏡を添えて葬るものよ、と彼らは言う。
復活の日に目をあけたとき、
顔を眺めて自分のことがわかるように。

でも小さな娘よ、小さくはかない私の命よ、それはあなたには
ふさわしくない。あなたには、まだ顔の形もなかったのだから。
手や指や、丸い形のつま先と折り曲った足はあった。あなたの胸には
まるごと赤い一個のキャンディのような心臓があった、
思いやりの心のかわりには白いアイリスの花が育っていた。

(1991年)

パトリック・レイン
(Patrick Lane)

「象」¹⁵

日没にくすむ日干し煉瓦の家のように
ひび割れたスギ板張りの飯場が
私の背後に横たわる
私は腰をかけながら
大きな茶色い石けんの塊で
一頭の象を彫る
叢林を1マイルほど奥に入った村に住む
あのインディアンの少年に見せてやるために。

アル中のトラック運転手や
トラクターの操縦者も
目を閉じて私のわきに坐っている
誰もが坂の作業場へ戻る前の
最後の時間を惜しんでいる

私もひととき忘れようとする
あの冷えびえと果てしのない山奥の夜
蚊が襲う暗闇の時間
石と土をすり潰す
あの坂の向こうの
ガタン ガタン ガタンと永遠に続く音のことを

象の形が出来てくる—
私のナイフが滑らかに石けんを撫でていくと
茶色い鱗片がそぎ落とされる
少年はそれを集めて村に持ち帰り
母親にあげるのだ

ほどなく象が出来上がる 私はそれを彼に手渡してやる
少年はしばらく
その大きな獣の彫り物を見つめると
乾いたヒマラヤ杉の上にのせてみる
そして私を見上げて、
少年は聞く

「象ってなあに？」

私は彼に象たちや
密林の話をしてあげる。誰も見つけたことのない
象たちの墓場のこと
熱帯雨林に棲むその寡黙な動物が
どのようにして群れを離れ
はるか遠くの死に場所を
見つけに行くのかを。
すると少年は微笑みを浮かべ

父が埋葬されている彼の部族の
墓の話をしてくれる。でも遠い昔のことなので
いつからそうし始めたかは誰にも分らない
私は少年にその墓地はどこかと聞いてみる

でもその場所は今はない
この新しく敷かれたハイウェイの坂の下に沈んでしまい
もう誰にも見つけ出すことは
出来ないのだと
私に答えて少年は言う。

(1969年)

「野生馬たち」¹⁶

一度でもひとりでここへ来てみたかった、
ロッキーの腰まで埋まる雪の中を
裸の脚を踏み上げ駆けていた
あの野生馬たちのいたところへ。
たった一度でもひとりで。人間たちや
トラックなどには出会うこともなく。

たった一度でも。五頭の雌馬を引き連れた雄馬が
あの銃口に飛び込むとき
あたりに動くものはない。死が待っているだけだ。
馬たちの目が霜に覆われかすんでいる。
太綱が馬たちを引くと
氷が鼻から流れ出る。

毒づきながら
雪を踏み落とした後で
私たちはゴールデンへ降りて行く。

「もうぶつぶつ言うのは止めにしろ。
確かに300ドルぼっちの馬肉のためには
てんで割に合わない仕事だが。」

こんな愚痴と死んだ馬のどんよりとした目
そして馬たちの消えたうつろな草原。

(1969年)

* ゴールデン ブリティッシュ・コロンビア州の町。現在はカナディアン・ロッキー観光の要所、リゾート地として知られる。詩の中ではゴールデンという地名そのものに皮肉な意味合いがこめられている。

「身をよじりながら横たわる女」¹⁷

寝台の上で
生身からえぐり取られた彫刻のように体をくねらせ
身をよじらせている女がいた。
破れた翼のように垂れた髪
その髪ほどに黒々とねじれたものが
女の手の中にある。
女は私と同じ階に住む。

彼女の周りには死臭が漂う。
私がそのとき目にしていたのは
縫い針で突かれた胎児

女の両腿の間で
油脂のようにだらりと垂れた血だ。

かつて寝台の上で見たのはこの女
彫像のように身をよじらせて死んでいた女の体だ。
彼女の名前は忘れてしまった。
覚えているのは
瞼が閉ざした壁だけだ。
それが孕むいくつもの沈黙だけだ。

そしてあの女の目、
その目の色を私は知ることはない。

(1969年)

「サスカチュワン」¹⁸

吹きつける風の中
体の震えを抑えながら
ようやく煙草を巻きあげる。

あまりに多くを俺はおまえに残してきた。
俺がおまえにこしらえた
下腹のくびれは消えないだろう。おまえは俺の前で
踊っていた、二人目の子を宿した体で。
それは八年前のことだった 今は
もうおまえはいない—

ただこの広漠としたプレーリーと
垂れこめる暗雲のように
消えることのない傷痕だけ。
この土地が視界から遠ざかるとき
この手が触れるものは何もない、
しがみつくものも何もない。

ただこの震え　そして
この虚ろな土地に
吹き渡る風の中で
こわごとと灯る
この最後のマッチ以外には。

(1969年)

「マウンテン・オイスターズ (雄羊の陰囊)」¹⁹

羊の糞の中に膝をつき
彼は今年生まれた一番大きな羊を選び出す
尻尾をわきに払いのけ
陰囊に切り口を入れ
睾丸を口に含めると
きれいにまわりを噛み取っていく

体をこわばらせ　立ち尽くす雄羊
ひとすじの悲鳴

黒い粘液が流れると
彼は睾丸を吐き出し腕に入れる

子どもだった頃
私たちはそんな風をしていたのだ。

それが他のやり方と比べても
特にひどい痛みを伴うわけでもなかったし
雄羊を興奮させて
好き放題に雌と交尾させるわけにもいかないのだから

私は彼とそうやって味わったものだった
上手にそれを切り取っては
油で揚げて。

雄羊のタマを食うと精が付くんだ

と彼は言った
雄羊たちはあの牧草地で
疲れ果てた老人の青ざめた手のような両脚で
痛みをこらえ
小刻みに震えながら立っていたけれど。

(1971年)

「ボゴタの子どもたち」²⁰

まず知っておかなくちゃならんのは、奴らは
子どもじゃないということだ、とマヌエルは言う。
憐れみをかけるのはよせ。この町のこの通りには
5千人からの連中がうろついているんだから

無邪気そうに見えたって
奴らに人間の心が宿っているわけじゃない。どいつも
一回の飯にありつくためなら人殺しだってしかねない連中なんだ。
子どもじゃないかだって？あの露店の裏の道路わきにいる

二人をちょっと見てみろよ。俺は奴らが犬の目を太針で
えぐり出すのを見たんだぜ、ただ吠えかかってくるというだけの理由でな。
明日はそれがおまえになるかもしれないんだ。
奴らがどこから来たのか誰も知らないが

確かなのは奴らはどこにも行きはしねえということだ。
5年も経ったら大人になって犬殺しには飽きちまうだろう。
そのころにはお前も監視兵^{カラビネーロス}が奴らを撃ち殺すのに
真っ先に賛成するだろう。

(1975年)

* ボゴタ (Bogota) 南米コロンビア共和国の首都、人口約400万。

「もしも」²¹

家族が食いつないでいくために
ティファナの粗末な木の舞台の上で
ロバとの獣姦劇を演じる瀕死のメキシコ女のように
おまえは独りぼっちの孤独な女だ、俺もまた死ぬこともできずに
今日もテキーラに酔う、
痛みに嗚咽する女
ロバの異様な雄叫びを思い起こしながら。全裸の
おまえ、でも俺はもうおまえを抱く気はしない。
もし最後に何かを思い浮かべることが許されるなら
それはナイフのイメージだ、
痛みに終止符を打つ夢だ。
さあ服を着ろ。
俺は最低の男。
ロバが女の体を床に落としたとき
笑っていた一人が俺なのだから。

(1975年)

*ティファナ (Tijuana) カリフォルニア州サンディエゴに近いメキシコの観光都市。

「生きていただけ」²²

雪のプレーリーに埋もれた白く暖かい地下の処置室で
俺が彼らに語ったのはあのひどい出来事のことだけではない。
しかし今ではそれに何の意味があったかは

自分ですらも分からない遠い昔の出来事に、
会話が途切れたときの場つなぎ話になってしまった。
所詮、そうした話なんてものは
ティンダルの石に封じ込まれた化石のようなもので、
ただそこにあるというだけで、その意味などは誰にも分かりはしないのだ。

俺たちは山道をかれこれ5時間は走っていた、
真っ赤に濡れた止血帯、座席にいた彼は
計器板の光りで距離を確かめながら
マイルが刻まれるごと 残された腕の付け根を持ち上げた。
煙草を口から離すたび、「こん畜生」と彼は何度も言い続けた。
ピンク色のアイスクリーム桶の融け始めた氷の中で
切断された手がパシャパシャはねた。
彼は決してそれを見なかった。
そして俺が彼の袖をまくり 看護婦にそれを見せるまでの
お定まりの馬鹿げた流れ、
名前に生年月日、その証明になるものの確認だ。
彼は腕を見せ、苦笑いを浮かべていた。
むき出しの静脈と腱を見た看護婦が
顔を背ける。そこでようやく医者たちの出番となった。
俺はまだそれは使い物になるかと聞いてみた、
たぶんだめだと医者は言う。数時間はかかったが
結局、その手は元通りにはならなかった。

北へと向かう夜の道で
俺はノコギリとその歯からぶら下がるあの肉のことを思い出した。
歯はそれを完全にぶち砕いたわけではない、

掘削機から下りてきたあの歯車にちょっと噛ませただけだった。
しかしその手は桶の中にある。
氷はすでに融けていた。俺は水を捨て、
空っぽのカップのように縮んだそれを見た、
それは眠れる濃青色の蜘蛛のようにも見えた。だからといって
何とも感じないのが不思議だった。
俺はそいつを乾燥させて、彼がいつか戻ってきたら
手渡そうとも考えた。そう思うと可笑しくなった、
陽を浴びながら飯場の窓に
それがぶら下がっているのが目に映る。
打ち付けた釘の周りに光りが踊る、
ひょっとするとそれは鳥の餌台くらいにはなるかも知れない、
カナダカケスが指に留まって
手のひらからその脂身をついばんでいる、
俺はそんなことを思い浮かべた。
ヘッドライトに灯されたトンネルのような道に
ひたすら車を走らせていると
そんな風にもなるものだ。夜と山々に囲まれて。

おれはマッド・リヴァー橋に車を止めた、
8時間はぶっ通しで走ってきたから。
だが、ここからが奇妙な話になる。
俺は手桶から彼の手を取りだして、暗闇の中で
抱えてみた。結局それは
肉の塊に過ぎなかった。それは棍棒か
それとも土いじりの道具くらいにはなったろう、
もし腕が麻痺してしまったら

それがあると感じていても、
そこにはないのと同じだということだ。
じゃあ、なくした自分の一部をどう始末したらいいんだろう。
俺がそれをしまっておくことはできないし、彼の女房に
渡すわけにもいかなかった。それを埋めてしまうって？
何のためだ？彼の人生は終わってしまったが、
それでも彼はまだ生きていた。
外は冷えて、夜は更けている、
それに明日の朝は早番だ。
俺はそれを橋から放り投げた、
するとそれは闇の底に落ちていく前に
一瞬 月をつかんだのだ
まだ付いているその指で。

今ではこれもただの話に過ぎない。
ときどきそこにいたのが俺でないとよかったのにとすることがある。
ひどい話だって？とんでもない、両手以上のものを
なくした男だって俺は何人も知っている。
こうして、ここで坐ってワインを飲んでいると
それはみんな遠い昔のことのよう思えてくる。あの暮らし全体が
すぎましかったのだが、そのときはそんな風には思わなかった。
他のことは何も考えずただ生きていただけのこと。
彼はどうしたかって？もちろん戻ってはきたさ。何とかよくなって。
しかし妻と子どもはもうどこかに行ってしまったた。
仕上げ鋸作業員の男とエドモントンへと逃げ去ったというわけだ。
二、三日は彼もこの辺りをうろついていたが
手のない男に仕事なんかあるはずがない。現場監督のクロードは

彼にはそこから出てってほしかった。言うまでもないことだが。

(1981年)

*ティンダールの石 (Tyndall stone) ウィニペグで産出される苦灰質で斑点のある石灰岩。大量の化石を含んでいることで知られる。

「晚餐」²³

キリストに従^ついて行かなかったあの男と
食事がしたい。

イエスが「私に従^ついてくるがよい、
されば汝を人間をとる魚師にしてあげよう」と言ったとき、
そうはせずに ひとり自分の船に乗り
残してきたものたちのために
今以上に働かなくてはならないと考えながら
きれいに繕い直した網を携え
岸を離れ、漕ぎだして行ったあの男と。
彼の妻と子どもたちが眠りについたとき
火を絶やさぬよう気遣いながら
私は彼と浜辺に腰をおろして語りたい、
一杯の葡萄酒を分かち合いながら、
二人がどう生きたのか、私たちが
つかみとってきたもの、
私たちが逃してきたものについて。

(1991年)

「マカロニの歌」²⁴

マカロニのことを思い出す、
月の終わりの
最後の週に
食べるものが残り少なくなったときのことを。

私は子どもたちのために
マカロニの歌を作った。

マカロニの歌！

笑いながら 歌いながら
私たちはテーブルの周りを
回ったものだった。

「マカローニ、マカローニ！」ってなぐあいに。

今 その歌をこの頁に
再現してみせることはできない、
覚えているのは、ただ私たちが
大声で笑い合っていたということだけだ。

妻は
マカロニを茹でる
くすんだ鍋のそばに立っていた。

妻が歌うことは一度もなかった。

決まってそれは6時だった。

子どもたちは叫んだものだった、

「『マカロニの歌』を歌おうよ！」

そして私も一緒に歌うのだった。

ある晩 私は
サゲッティさんの庭から
トマトを3個盗んでしまった
そしてそれを茹で湯の中に
私は入れた。

私の妻。
愛してくれていた私の妻。
二人は生きていくために
必死で働いていた。

3個のトマト。
まだその夢を見る。
私たちは、結局、
貧しかったのだ。

でもひとり娘を腕に抱えて

テーブルの周りで
息子たちと
踊りながら
あのマカロニの歌を歌ったときは、
ひととき
本当に幸福だった。

灰色のストーブの傍で
妻は鍋から淡い色のマカロニを掬い、
それぞれの皿にのせていた、
あの夜は
3個のトマトの
細い糸が引いていたけれど。

私はまだその夢を見ることがある。

サゲッティさん、
もう亡くなってしまったけれど、
たとえ今あなたがどこにいても、
これはあなたに捧げた詩。
あなたのトマトを盗んだことは
本当にすまない。
私たちは貧しかった、私は
子どもたちのために、もう少し
あげたかった。

(2000年)

あとがき

本稿は英語系カナダ現代詩人の作品を訳出する前々号からの継続的な試みである。今回は『不意の輝き—サスカチュワンの詩』(*A Sudden Radiance: Saskatchewan Poetry*, 1987)と題するアンソロジーに収録されたエリザベス・ブルースター (Elizabeth Brewster 1922-)、アン・ズミガルスキー (Anne Szumigalski 1922-1999)、パトリック・レイン (Patrick Lane 1939-) の主要な詩集から彼らの詩の一面をよく表わしていると考えられる作品を選んだ。前号ではアルバータ、サスカチュワン、マニトバ州にまたがるカナダ大平原と深い関わりを持つ詩人たちの作品を取上げたが、今回もその延長上にある。ここでは上記の詩人の紹介に先んじて、主に1960年代末から80年代末にかけての所謂「プレーリー詩」の特質などについて前号に補足する形で若干ふれておきたい。

『不意の輝き』の編者の一人でアルバータ州出身の詩人ローナ・クロウツィアー (Lorna Crozier, 1941-) がその序文で指摘するのは、「プレーリー詩」に対して抱かれてきた一般的なイメージと現実に書かれている詩とのズレであると同時に、近年の「プレーリー詩」に見られる豊かな多様性である。彼女は批評家ヘンリー・クライゼル (Henry Kreisel) が「カナダ西部平原で生まれた文学をめぐるあらゆる議論は人間精神に対する風景の強い影響の問題から始めなければならない」(Kreisel, 44) と述べた初期のプレーリー小説に関する分析の意義は認めながらも、それ以後も引き継がれるプレーリーの詩や小説に対する言説——「恐怖や孤立感をもたらし、人間の苦悩を外在化させたかのような荒寥とした風景、神話も歴史も存在せず、人間同士のつながりも欠いた土地が他の現代詩人とは異なる内面の諸相を有する詩人たちを生み出した」など——が現代ではいかに一面的なものかを例示する(*Sudden*, xvi-xxi)。風景と人間の内面との関わりひとつを取上げても、そのあり方はこの地に住む詩人たちにとって自明なものではありえない。プレーリーという風景は確かに所与のものとして

存在するが、その現れは必ずしも人間に敵対的だとばかりは言えず、プレーリー世界が詩人の内面に与える影響は「複雑で、両義的であり、きわめて私プライベート的なもの」となっているのである。またプレーリー世界には見られないとされてきた「神話的なもの」については、今回取上げたアン・ズミガルスキーなどの詩人にその生成への衝動の具体例が示され、さらに正典から排除されていたために「存在しない」とされてきた土地固有の歴史の発掘に関しても今では多くの詩人たちに取り組みつつある。確かにクロウツィアーが述べるように、プレーリー地方、あるいはサスカチュワンに限っても、近年そこで書かれつつある詩はその地域の風土や生活世界に多種多様に反応するさまざまな表現の中にこそ見出されるのである。

そうした多岐にわたる現代のプレーリー詩にいくつかの特徴や傾向が見られないわけではない。詩人フレッド・ワー (Fred Wah 1939-) は、クロウツィアーの序文とも一部重複してはいるものの、主に1970年代中頃から80年代中頃にかけての「サスカチュワンの詩」について、息のリズムに基づいた詩行、土地の言葉の使用、地域特有のイマジラリー、さらに主題を逸話風の語りで進展させるなどの点を指摘している (Wah, 197-219)。ワーは抒情詩、散文詩、さらに長編詩などのジャンルを概観するが、その過程で彼もまた風景と人間との関係からだけでは推し量ることのできない「サスカチュワンの詩」の多義的な詩的可能性を明らかにしていくのである²⁵。

ところで私たちはある特定の地域的特性を備えた詩を「プレーリー詩」と呼んでいるが、詩人の側の意識と照らし合わせると、そうした括り方には一定の留保が必要なことは言うまでもない。例えばパトリック・レインの場合、サスカチュワン州との関わりは比較的短期間（滞在年数で6～7年）であるにもかかわらず、「プレーリー詩人」(a prairie poet) という意識の強い詩人と言われる(Wah, 197)が、他方今回の作品にもうかがわれるようにプレーリーの風景が心象に大きな位置を占めるエリザベス・ブ

ルースターの場合には、自身が「(プレーリーという) ある特定の場所の詩人」として呼ばれることにやや違和感を持ち、「地域的なものが強調される余り、それ以外の自分の詩に対して目を塞がれてしまう」(*Saskatchewan*, 166)ことを怖れている。またアン・ズミガルスキーは『プレーリー詩』というものが存在する」のではなくて、「そこにプレーリーが存在し、その地域で書く詩人がいるだけ」と極めて明快に述べてもいる(Wah, 198)。このことは必ずしもズミガルスキーの詩が彼女を取り巻く空間から切り離されているということを意味してはいない。彼女の一見現実から浮遊したかのように思わせる詩においてさえ、「プレーリーの日常の風景や大地とのつながりは感じられる」(*Sudden*, xx) のであり、またここに挙げた他の二人の作品についても、もしそれがプレーリーという特定の場所を背景としていなかったとするならば、やはり全く別なものになっていたのではないかと想像されるのである。とは言え「プレーリー詩」が実に多様な表現世界を内包しており、プレーリーに対するそれぞれの詩人の関わり方にも濃淡があることは確かである。こうしたことを心に留めながら、私たちはこの土地で試みられる表現のさまざまな可能性と向き合うことになる。

エリザベス・ブルースターは、大西洋沿岸州ニューブランズウィックに生まれ、地元の大学を卒業後は、アメリカや英国などで教育を受けた。ブリティッシュ・コロンビア州、アルバータ州などで図書館員として勤務、1972年から1990年までサスカチュワン州立大学に勤め、同大学名誉教授となった。刊行された詩集は20冊以上に及び、最近では『ヨブ記への脚注』(*Footnotes to the Book of Job*, 1996) がカナダ総督賞の候補になった。また小説も数冊出版している。文芸批評家のパーシー・デズモンド(Pacey Desmond, 1917-75) は60年代中頃までの彼女を「マイナーな(目立たない) 詩人」と捉えながらも、彼女の詩には「真正な感情と細やかな感覚が溢れ」、確かな技法、深い思索の跡が認められると述べているが

(Pacey, web)、後年の詩はデズモンドが評価していた彼女の資質の一面を発展的に継承していると言える。先のワーもブルースターの『選詩集1977-84』(*Selected Poems 1977-84*)は「シンタックスと行分けの微妙な配慮が行き届き、思索的で、謎を秘めた詩行を生み出す「卓越した抒情詩の達成」と賞賛している(Wah, 202)。彼女には外界の風景と内面との交流や日常の生活の背後にある神秘を静かに見つめた作品が多いが、「ロマンス」などに見られるように、ユーモアを滲ませつつ、凜として感傷に流されない強さがある。また過去の回想や郷愁が靈感の源泉となることも多く、今回取上げた作品には主にそうした面が強調されている。しかし平易な口語的表現を用いた穏やかな彼女の詩風はさまざまな形で詩的実験が行われている今日のカナダ詩にあってはどちらかと言えば地味な印象を与える。そうした中であって北米を代表する女性詩人・作家マーガレット・アトウッド (Margaret Atwood, 1939-) が、ある講演の中で彼女に何らかの形で影響を与えた多くの詩人たちの一人にブルースターの名を掲げ (Atwood, web)、さらに彼女の編纂によるカナダの近・現代の主要な詩人を収録した『オックスフォード版英語系カナダ詩』(*The New Oxford Book of Canadian Verse in English*, 1983) にも彼女の作品を取上げているなど、ブルースターを積極的に評価しているのは興味深い。

アン・ズミガルスキーは英国に生まれ、ハンプシャー州で教育を受けた後、第二次大戦中は英国赤十字のもとで働いた。今回は訳出していないが、彼女には戦時中の体験に基づいた詩や劇作品も多い。結婚後サスカチュワン州に移住、1951年以降はサスカトゥーン近郊に住み、詩人、編集者、翻訳者、劇作家としての活動した。1995年『声』(*Voice*) でカナダ総督賞受賞している。幼少から老年に至るまでのそのときどきの女性の生、男女の関係や子どもへの愛情、戦争の記憶、プレーリーの風景、あるいは表現行為それ自体を題材にしながらも彼女の詩の根底には夢想的、霊的なものへの憧れが漂う。また「イラクサ」などに見られるように日常的次元からし

だいに時間や永遠といった哲学的、宗教的な問題にまで詩的な思いをめぐらすのも彼女の特色である。こうした点は彼女とウィリアム・ブレイクとの結びつきを強く感じさせるが、実際、彼女の『言葉、声、テキスト』（*The Word, The Voice, the Text: The Life of a Writer*, 1990）と題する自伝的エッセイ中でしばしば引用されるのは聖書とブレイクの著作であり、B氏(Mr. B)として彼女の詩の中にも登場するブレイクは、リアリズム小説の伝統が優勢なためにカナダ文学（とりわけ「プレーリーの文学」）の中で軽視されてきたと彼女が考えていた「想像力」の解放、幻想的世界への自由な飛翔へと彼女を導く大きな力となっていたのである。

ある批評家は、「善し悪しは別として、ズミガルスキーの詩にはシルヴィア・プラス、アン・セクストンらにおけるような、女性が置かれている生の現実（夫あるいは恋人、家事、子どもとの関係など）から発せられる肉声を欠く」という趣旨のことを述べている（Katheleen, 214）。この「肉声」というのは、単に生身の人間から発せられる直接性を含意するものというよりは、多分に「告白詩人」的な意味合いがあると思われる。しかし仮に「直接性」あるいは「告白性」が寡少であるからといっても、それが必ずしも「生の現実」から回避していることにはならないだろう。「イラクサ」、「ある産婆の話 第1話」、あるいは「ハリンカ」などで行われているのは孤独、死、別離、喪失などの女性の「生の現実」を私的な形で神話化する試みであって、その心的な契機となっているのは、そうした事態についての根本的な説明を求めようとする差し迫った感情である。従ってズミガルスキーが創り上げる夢的世界は生きている現実に目を背けることからではなくて、むしろ理不尽な現実の出来事に対して「なぜ」と問う根源的な衝動から生まれているのである。彼女はあるインタビューで、女性であることの意味を深め、探求していくことの重要性を語っているが（*Waves*, 55-56）、彼女の詩的世界は女性としての「生」を語る内奥の感情の声という意味で、セクストンらとは違った形で、最も「肉声」に近いと

ころから発せられたものとも言えるのではないか。

パトリック・レインは、ブリティッシュ・コロンビア州奥地の僻村に生まれ、30代半ばまで、主にカナダ西部諸州で過ごし、森林伐採作業員、坑夫、現場看護人として生計を立てながら詩作を続けた。そうした意味では彼は筆者がこれまでの『訳詩集』で取上げたアル・パーディ、オールデン・ノーラン、ジョン・ニューラヴらと同じく肉体労働者としての経歴を持つ詩人の一人である。『野蛮なりし心の手紙』(*Letters from the Savage Mind*, 1966)などの先行詩集をまとめた『分離』(*Separations*, 1969)には、緻密な音楽性を感じさせる抒情的な詩の形式や「プレーリー詩」にしばしば見られる逸話風の語りのスタイルなどを織り交ぜながらカナダ西部地方の開拓者たちの苛酷な生活、荒寥とした内面的世界を描いた作品などが多く含まれている。そこには、「象」などに見られるような貧しきもの、弱きものたちへの共感が描かれる一方で自分たちの内面に潜む暴力性がおぞましいほどリアルに描かれる。「私は知らなかったから」という詩でレインは、ブリティッシュ・コロンビア州奥地で過ごした少年時代に「私はやさしさを教えられたことがなかった」、「動物たちや他の人間たちに対する私たちの扱いがそれほど酷いものとは思っていなかった」('Because I Never Learned,' *Separations*, 19)と書いているが、生き物たちに加えられる暴力を描いた「野生馬たち」、「マウンテン・オイスターズ(雄羊の陰囊)」や安宿の寝台で自力の中絶を試みて失敗する「体をよじりながら横たわる女」などの作品はカナダ西部における生活世界や風景に対する郷愁や幻想を打ち砕く²⁶。

70年代初頭に彼は南アメリカなど各地を旅しているが、カナダ総督賞を受賞した『新・選詩集』(*New and Selected*, 1978)には、そうした体験をもとにした作品も収められている。しかし「ボゴタの子どもたち」、「もしも」²⁷などは、それまでの詩と同様に、悲惨な現実の描出によって、人間の残虐性や共犯性を鋭くえぐる。この頃のレインの詩篇の多くは、貧困

と苦難の生活から逃れる術を持たない人々の悲劇や人間の心に潜伏する「グロテスクな怪物たち」と戦う内面の地獄の追求にあったように思われる。またこの『新・選詩集』にまとめ上げられる前に出版された小詩集の幾冊かにはレイン自身による幻想とも徹底したリアリズムの表象ともとれる挿絵が各所に施されており、人間に巣くう欲動、すさんだ生のありさまが生々しく描かれている。しかしそこには、どのようにしても罪の意識から逃れられない人間に対する憐れみや、露悪的とも捉えられかねないほどの挿画の表層下には深い悲しみの感情が滲んでいるようにも感じられる。

1977年以降の作品を集めた『選詩集』(*Selected Poems*, 1997)には、荒寥とした世界を背景にしながらも、やさしさや救いの歌への発露が見られるようになる。「生きているだけ」、「晚餐」などは、悲劇や葛藤を鮮烈に提示することよりも、その意味を内省し、理解しようとする心の動きがあるように思う。「詩は私たちにとっての救いとはならないが」、「たとえわずかではあってもある種の贖いを施してはくれる」(*Oxford*, 620)とレインは語っているようだが、最新詩集に収める「マカロニの歌」では貧困や苦難が「歌」という恵みへと転換する場が罪の疼きを伴いながらもいとしげに回想されている。近年では彼は小説作品も発表し、代表作に短編集『君は「美しい」と綴れるかい?』(*How Do You Spell Beautiful?*, 1992)がある。またローナ・クロウツィアーをパートナーとして共同で執筆した詩集やアンソロジーなども多数出版されている。

(付記) 訳詩は詩人の生年順とした。参考のために可能な限り各詩の初出年をそれぞれの作品の末尾にカッコ書きで記し、必要に応じて訳注(*印)を付した。使用したテキストについては以下のように後注として掲げた。

注

- 1 'The Thirty Below,' Elizabeth Brewster, *Sunrise North* (Clarke, Irwin & Company Ltd., 1972), 31.
- 2 'The Future of Poetry in Canada,' *Sunrise North*, 13.
- 3 'Romance,' Elizabeth Brewster, *In Search of Eros* (Clarke, Irwin & Company Ltd., 1974), 44.
- 4 'Where I Come From,' Lorna Crozier & Gary Hyland, eds., *A Sudden Radiance* (Regina, Sask: Coteau Books, 1987), 8.
- 5 'Road Between Saskatoon and Edmonton,' *A Sudden Radiance*, 22.
- 6 'Summers Here and There,' Dennis Cooley, ed, *Inscriptions: A Prairie Poetry Anthology* (Winnipeg, Manitoba: Turnstone Press, 1992), 59-60.
- 7 'Nettles,' Ann Szmigalski, *Woman Reading in Bath* (Toronto: Doubleday Canada Ltd., 1974), 82-83.
- 8 'It Wasn't a Major Operation,' *Woman Reading in Bath*, 69.
- 9 'Grey-Eyed Frances,' Ann Szmigalski, *A Game of Angels* (Winnipeg: Turn-stone Press, 1980), 28.
- 10 'Angels,' *A Game of Angels*, 34.
- 11 'A Midwife's Story One,' *A Game of Angels*, 38.
- 12 'A Midwife's Story Two,' *A Game of Angels*, 39.
- 13 'The Lullaby,' Ann Szmigalski, *Doctrine of Signatures* (Saskatoon: Fifth House, 1983), 42.
- 14 'Halinka,' Ann Szmigalski, *Rapture of the Deep*, (Regina: Coteau Books, 1991), 14.
- 15 'Elephants,' Patrick Lane, *Poems: New and Selected* (Toronto: Oxford University Press, 1978), 16.
- 16 'Wild Horses,' *Poems: New and Selected*, 18.
- 17 'There Was a Woman Bending,' *Poems: New and Selected*, 23.
- 18 'Saskatchewan,' *Poems: New and Selected*, 24.
- 19 'Mountain Oysters,' *Poems: New and Selected*, 38.
- 20 'The Children of Bogota,' *Poems: New and Selected*, 75.
- 21 'If,' *Poems: New and Selected*, 98.
- 22 'Just Living,' Patrick Lane, *Selected Poems 1977-1997* (Harbour Publishing, 1997), 15-17.
- 23 'Dinner,' *Selected Poems 1977-1997*, 104.
- 24 'The Macaroni Song,' Patrick Lane, *The Bare Plum of Winter Rain*

(Harbour Publishing, 2000), 12-13.

- 25 ワーはサスカチュワン詩とプレーリー詩は区別できないとしているので、サスカチュワン詩の特質としてあげた点は、プレーリー詩にも当てはまると考えてよいだろう(Wah, 198)。
- 26 しかしこうした現実を描くのは彼ばかりではない。アルバータ出身の女性詩人レオナ・ゴム(Leona Gom, 1946-)の「生き残ること」(Survival)という作品を一例として挙げておく。「やさしさなんてものはなかった／農場で育つことへのロマンティックな幻想なんか／くそ食らえ／私が覚えているのは苦痛と死だけだ／豚が去勢される時期となれば／彼らの叫喚が午後中響き渡り／父は罪深い血にまみれて家に入ってきたものだった／(中略)／子猫たちは納屋の壁に／撲ちつけられ／老いて家畜追いができなくなれば犬は撃ち殺される」(*New Canadian*, 297)。
- 27 マーガレット・アトウッドはブルースターやズミガルスキーの詩数篇とともに、レインのこの「もしも」を彼女の編纂した『オックスフォード版英語系カナダ英語詩』に収録している。

引用文献

- Allen, Elizabeth. "Interview with Anne Szumigalski." *Waves* 14. 1-2 (1985)
- Atwood, Margaret, ed. *The New Oxford Book of Canadian Verse in English*. Oxford University Press Canada, 1982.
- Crozier, Lorna & Gary Hyland, eds. *A Sudden Radiance*. Regina, Sask.: Coteau Books, 1987.
- Desmond, W.C. Parcey Fonds-Series2.1. <http://www.lib.unb.ca/archives/pacey/s21.wtoad/html>
- Geminder, Kathleen, "Nightmare Vision," In *Essays on Canadian Writing* no.18/19 (Summer/Fall 1980) Prairie Poetry Issue. Eds. Jack David & Robert Lecker.
- Kreisel, Henry, "The Prairie: A State of Mind," (1968) In *Essays on Saskatchewan Writing*. Ed. E. F. Dyck. Regina, Sask.: Saskatchewan Writers Guild, 1986.
- Lee, Denise, ed. *The New Canadian Poets 1970-1985*. McClelland and Stewart, 1985.
- Wah, Fred, "Contemporary Saskatchewan Poetry," (1986) In *Essays on Saskatchewan Writing*.

W. B. イエーツ 『イエーツ詩集』加島祥造訳 思潮社、1993年。

参考文献

- Abely, Mark, "Laying Down the Law." In *Essays on Saskatchewan Writing*, 163-168.
- Atwood, Margaret. "On Writing Poetry" (Lecture) <http://www.web.net/owtoad/lecture.html>
- Benson, Eugene and William Toye, eds. *Oxford Companion to Canadian Literature*. Don Mills, Ontario: Oxford University Press, 1997.
- Christopher, Levenson. "Patrick Lane's Violent Poetry." In *Queen's Quarterly* 87 (1980), 22-29.
- Dermot, McCarthy. "The Poetry of Patrick Lane." In *Essays on Canadian Writing* 39 (1989), 51-89.
- Lane, Patrick. *Separations*. Trumansburg, N.Y.: New Books, 1968.
- . *Mountain Oysters*. Vancouver: Very Stone House, 1971.
- . *Unborn Things: South American Poems*. Madeira Park, B.C.: Harbour, 1975.
- . *No Longer Two People*, Winnipeg: Turnstone Press, 1981.
- . *Woman in the Dust: Poems and Drawings*. Oakville, Ontario: Mosaic Press, 1983.
- . *How Do You Spell Beautiful?* Saskatoon, Sask.: Fifth House Publishers, 1990.
- Pearce, Jon. *Twelve Voices: Interview with Canadian Poets*. Ottawa: Borealis Press, 1980, 6-23.
- Szumigalski, Anne. *The Word, The Voice, The Text*. Saskatoon, Sask.: Fifth House Publishers, 1990.
- Szumigalski, Anne & Mariw Eluse St. George. *Voice*. Regina: Coteau Books, 1995.
- Woodcock, George. "Patrick Lane," In *Canadian Writers and Their Works*. Eds. Robert Lecker, ed. Toronto: ECW, 1985, 133-85.